みんなで考えよう 市町合併 第21回

新市将来構想策定住民シンポジウムを開催

新市将来構想策定委員の皆さんによるパネルディスカッション

去る3月29日、「新市将来構想策定住民シンポジウム」を甲良町公民館で開催し、1市3町の住民の皆さんや関係者など約220人が参加されました。

このシンポジウムは、彦根市・豊郷町・甲良町・多賀町合併協議会が主催し、社団法人彦根青年会議所の協力を得て開催したもので、「新市将来構想案」の概要報告、新市将来構想策定委員の皆さんによるパネルディスカッションなどを行いました。

シンポジウムでは、1市3町の住民40人で構成する「新市将来構想策定委員会」でまとめられた構想案の概要と、次のような特徴が、小川良紘委員長から報告されました。

《構想案の特徴》

・行政側からの制約を受けることなく、住民主体で作られたものである。

・構想案策定にあたって、1市3町の住民2万人を対象としたアンケートを行い、住民の意向を把握するとともに、さまざまな意見などを構想案策定の重要な資料としている。

・住民のまちづくりへの意識を高め、参画を促すさまざまな仕組みを提案している。

・合併によって、これまで培われてきた歴史や文化が失われることなく、それぞれのまちの個性を互いに認め合いながら、その個性が響き合うまちづくりを提案している。

なお、構想案の概要は、「合併協議会だより第5号」（「広報ひこね」5月1日号と同時配布）に掲載されています。

参加者と策定委員が意見交換

会場の皆さんからは、たくさんの意見や質問が出されました。ここでは、質問の一部とそれに対する策定委員の皆さんからの回答を紹介します。

Q 新市将来構想案は、理想が高すぎるのでは？

A 理想が高いと思われるかもしれませんが、新市将来構想というのは、行政サイドではなく、住民として夢を語り合うということから始めました。合併は百年に一度のまちづくりのチャンスでもあり、夢を含めてそれぞれの地域で語ることが、将来の理想を実現する第一歩になるのではないでしょうか。

Q 現時点では、行財政運営の効率化が、まったく議論されていないのでは？

A 行財政基盤を確立して、住民サービスの維持・向上を図ることが合併の一番のねらいであり、重要な問題です。今後、新市建設計画の策定にあたってさらに議論を深めていくことになり、そこで財政問題についても考えていきます。住民の皆様にお示しして議論いただくことによって、よりよいまちづくりの観点から、適切な行財政運営が図れるように進めていくことが一番望ましいのではないでしょうか。

Q 地域のボーダレス化が進むなか、求心力が働きにくくなるのでは？

A 新市の将来像を「個性が響き合い、活力を生み出す　住み続けたいまち」としておりますが、身近なところで本当によいまちづくりを進め、それをほかのところに広めたり、よいところを大いに参考にして、お互いに協力し合ったり、競い合い、それぞれの地域がもっと個性化を進めていけば、よりレベルの高いものができてくるのではないかと思います。また、それによって各分野の求心力は逆に強くなっていくのではないかと思います。

参加者の感想の一部を紹介

◇もっと若者の参加が大切と思う。若者に新しいまちづくりを考える機会や場を提供していくことも必要である。

◇住民が持っている不安要素を、あと2年の間に地域から吸い取っていただき、住民に返してほしい。

◇まだまだ合併に対して間違った議論や意見も聞く。もう少し広く合併問題がまちの中に浸透していくように取り組んでいただきたい。

◇地域も考えも違うなかで、構想をまとめあげていくのは難しかったと思うが、合併に向かって、構想を実現していきたい気持ちが伝わってきた。

◇新しいまちがもうすぐそこに来ていると感じたが、今日一日ではなく、いろいろな方法で具体的に聞きたい。

◇発言の機会、生の声を聞く機会としては実に良かった。

合併に関する問い合わせ先
〒市町合併推進室
☎㉒1411番内線414番、FAX㉒1398番

まちの縁、ひとの縁　第四回

犬上古代の歴史

合併に向けた協議をすすめている彦根市・豊郷町・甲良町・多賀町の1市3町は、これまでどんな歴史を刻んできたのでしょうか。

「1市3町のあゆみ、つながり」をテーマに、今日まで伝えられてきた歴史をそれぞれの市町の歴史の研究に携わっている人に語っていただくシリーズの4回目です。歴史のなかから、合併を、これからの地域を、考えてみてください。

犬上の古代史を辿ってみると、犬上川の度重なる洪水や氾濫の堆積物で形成された沖積扇状地近辺に、縄文時代や古墳時代の集落跡が分布していることが分かります。

多賀庄、川原の庄、安食の庄の周辺に存在し、縄文時代の貝塚とされる金屋遺跡・佐目遺跡では、縄文土器が採集されたと言われています。また、古墳時代の集落としては、下之郷遺跡で5世紀中ごろまでさかのぼると考えられる竪穴式住居跡が確認されており、法養寺遺跡では、7世紀初頭の竪穴式住居跡が知られています。

犬上の中心となる犬上川左岸扇状地の開発は、古墳時代中期に始まったとされます。その後、同扇状地上には、長畑遺跡、尼子南遺跡、四十九院遺跡、雨降野遺跡など、7世紀から8世紀を中心とする集落が多数確認されています。これらの集落では、8世紀前半には竪穴住居と掘立柱建物が共存していましたが、8世紀後半には掘立柱建物のみからなる集落に変化し、水稲農耕に生活基盤をおく農業集落であったとみられます。

また、安食の庄の阿自岐神社は、古代の面影を残す神域です。この社は、漢氏の祖といわれる渡来人阿直岐（阿知使主）に因むものと言われます。湖東地方一帯では、朴市秦造田来津将軍一族の渡来人たちによる農耕の開発がうかがえます。また、雨降野は、「木間攫」によれば、かつて「九条埜」という広い原野があり、その楢林を拓いて農耕の地とされ、楢邑と呼ばれたようです。

また、「淡海古説」（乾）には、たった7行の古文書があります。そこに、「推古天皇の御宇（第33代、大和朝廷時代、西暦590年代）に、七日地より煙立て四つの石出でけん」とあり、大きな異変が生じたであろうと想像されます。地域の人々が来る日も来る日も林を拓いた農耕の地である楢邑が、ある日突然土石に埋もれたのは、恐らくは鈴鹿の火山爆発に起因する土石流か火山弾によるものと思われます。こうした災害に直面して、先人たちは、大自然の脅威にもくじけることなく土砂を取り除き、農耕を進めたのです。ただし、地形が大きく変動したために、水利の便は以前に比べ大きく変わりました。さらに、「淡海古説」（乾）には、「地かわき出て田畑迄大旱魃の所となれり、百姓難儀に及しくば、百済寺の源住僧都をしやうし奉、常に雨乞の為、僧都、雨降野と改め給しや」とあり、このときより楢邑は雨降野と呼ばれるようになりました。今も湖東三山の百済寺には雨乞岩が祀られています。現在は水利豊かな湖東の稲作地帯も、昔は旱魃に苦しんだ農民が、雨を求めてこの岩に祈りを捧げ、雨乞い明神と崇めたのです。雨乞い行事は、雨降野のみではなく犬上各地で昭和時代にも盛んに行われていました。

我々の先人たちが、大自然の試練にも真正面から立ち向かい、人々が力を合わせ、助け合いながらただひたすらに精魂を傾け、農耕に村づくりに尽くして今日のあることを、歴史は如実に物語っているのです。

（豊郷町・豊会館館長　北川乙彦）

『淡海古説』（写本・彦根市立図書館蔵）